

## 〔研究ノート〕

柳沢淇園の大坂石街滞在に関する  
論文・史料について

2017年の秋に大和文華館で開催した「柳沢淇園一文雅の士・新奇の画家」展は、柳沢淇園（柳里恭）を大きく取りあげる約50年ぶりの展覧会でした。淇園の現在の一般的な知名度は低いですが、文人画の先駆者として江戸絵画史においては重要な人物であり、多くの関心ある方々にお越しいただくことができました。その中で、展覧会や展覧会図録では取りあげていなかった淇園に関する論文・史料を色々ご紹介いただきました。ここでは、ご教示の中より、淇園の大坂石街滞在に関する論文・史料を紹介したいと思います。

駒澤大学の近衛典子氏よりお教えいただいたのが、淇園の大坂石街の寓居「夕霞楼（暁霞楼）」の詳細について明らかにされた浜田啓介氏の論文「伊丹椿園は津国屋善五郎なり」（『近世文学 作家と作品』中央公論社、1973年）です。淇園が宝暦4年（甲戌／1754）の春から夏頃に大坂石街にある夕霞楼（暁霞楼）に滞在していたことは、『大和文化研究』第4巻第5・6合併号（1958年）に載る史料や、肥田皓三氏の論文「柳里恭佚文」（『大阪府立図書館紀要』7号、1971年）で紹介される史料を参照して、図録でも言及していました。具体的にその史料を挙げると、以下のようなものがあります。

・片岡子蘭『芸亭随筆三千年眼』の淇園序文  
「甲戌の春二月、余（=淇園）浪華に遊び、岡子蘭の鐘街芸亭を訪ふ。（略）宝暦四年夏首郡山柳里恭書于浪華石街夕霞楼中」

・坂上郁夫（名：文英、号：蜂房）『金魚賦註』の淇園序文  
「伊丹の阪郁夫、余と莫逆の交わりを

為す。茲年（=今年）春三月、来て余の浪華客館石街夕霞楼を訪ふ。（略）宝暦四年甲戌三月下瀬郡山柳里恭撰于浪華石街夕霞楼中」

・韜玉支煥『摹雕秋間戯鏡』の淇園序文

「（略）宝暦甲戌之春、余浪花に遊び、石街之夕霞楼に寓す。（略）宝暦甲戌夏四月郡山柳里恭撰」

・淇園「神感靈符泉記」  
「宝暦甲戌夏六月、余幹君之蠱、浪華に到り、石街暁霞楼に居す。（略）」

※いずれも原文は漢文。括弧内の文字は宮崎によるもの。

「神感靈符泉記」に「幹君之蠱」と記されていますが、「幹君之蠱」とは、子が親の失敗を補い盛り返す意味の『易経』の「幹父之蠱」を典故とすることから、郡山藩主であった淇園が、郡山藩主や藩の負債処理のために、この時期大坂に滞在していたのではないかと、前掲の肥田氏の論文や、橋爪節也氏の論文「柳沢淇園と播磨但馬間通船計画」（『大阪市立美術館紀要』11号、1998年）において指摘されています。展覧会では、宝暦4年に淇園が藩の借財整理のために大坂の商人たちと交渉していたことを伝える新出の史料「算段状」（宇賀志屋文庫蔵）を展示し、大坂での淇園の具体的な仕事の内容を明らかにしました。しかし、淇園が寓居した夕霞楼（暁霞楼）についてはよく分からず、石街の宿屋の一つであろうという解説をしていました。

近衛氏より教えていただいた浜田氏の論文は、安永～天明年間（1772～89）頃に活躍した戯作者・椿園の正体

を考察するものです。椿園はその著書『唐錦』や『怪異譚叢』の題辭において、「暁霞楼」で執筆したことを記しています。浜田氏は多くの史料を探索され、椿園とは津国屋善五郎のことで、その養父は伊丹の酒造家の名家で剣菱の醸造元である津国屋勘三郎、実父は津国屋の縁者の大鹿屋伊兵衛であること、実父の伊兵衛は伊丹の俳人として知られた坂上蜂房と同一人物であることを明らかにされました。蜂房は、先に引用した、『金魚賦註』の著者です。淇園の寄せた序文には、蜂房が淇園のいる夕霞楼に訪ねて来たことと記されているので、夕霞楼（暁霞楼）は蜂房の邸ではなく、津国屋の大坂における別業（本宅以外の邸）で、津国屋の養子であった椿園が後年にそこで戯作の執筆を行ったと考えられることを浜田氏は指摘されています。淇園の寓居していた夕霞楼（暁霞楼）は宿屋ではなく、伊丹の富豪の津国屋の別業であったことが分かりました。

近衛氏からも一つ教えていただいたのが、淇園が題字と跋文を寄せる『白雪齋詩集』です。この『白雪齋詩集』については、肥田氏の論文で触れられているものの、原本を見ることができなかったと述べられています。肥田氏の論文刊行後、1977年に汲古書院から刊行された『和刻本漢詩集成』第18輯にこの『白雪齋詩集』が収録されており、淇園の美しい篆書による題字を含め、その全容を見ることができるようになったのです。その中で注目されるのが、淇園が跋文の最後に「宝暦癸酉秋八月淇園主人柳里恭撰并書于浪花石街旅舎」と記していることです。夕霞楼の名は出ていませんが、宝暦4年よりも早く、宝暦3年（癸酉／1753）の8月にすでに淇園は石街に寓居していたことが分かります。

淇園の大坂滞在とも関係する史料で、早稲田大学の成澤勝嗣氏より教えていただいたのが、『松平美濃守日誌』中の淇園の記録です。『松平美濃守日

誌』は、淇園の仕えた郡山藩主・柳沢信鴻の日記です。この日記に淇園（里恭）の名が見られることはすでに知られていましたが、網羅的には紹介されておらず、展覧会図録でも、寛延元年（1748）10月16日条に淇園筆「関羽図」（東京国立博物館蔵）に信鴻が自賛を遺わした記録があることにしか触れていませんでした。成澤先生からは、『松平美濃守日誌』中の淇園（里恭）の記録を他にも多く教えていただき、宝暦3年9月5日条に「里恭大坂ヨリカヘリ土産モラヒ逢之」と記されていることを知りました。淇園は宝暦3年の8月と宝暦4年の春～夏頃には石街に滞在していましたが、この記録から宝暦3年の9月には一度郡山に戻り、信鴻に挨拶していることが分かります。

なお、山果亭紫笛『狂歌水の鏡』の淇園跋文には、「（略）今茲（=今年）七月、方（=山果亭紫笛）来て余の浪花石街の旅亭を訪ふ。（略）宝暦甲戌秋八月郡山柳里恭撰」と記されており、宝暦4年の7月にも淇園は石街に滞在していたと言いますが、豊津蒲丈の追悼句文集『月之華』の淇園の跋文には、宝暦4年の初秋（7月）頃に病で伏せていたものの仲秋（8月）になって回復して大坂へ行ったことが記されています。厳密な月日には記憶違いがあるかもしれませんが、淇園が藩務のために郡山と大坂を頻繁に行き来しつつ、大坂で文雅な交流を広げて、多くの書物に序文や跋文を寄せていたことが窺えます。このように、政（まつりごと）に深く関わりながら、詩書画などの文雅な制作活動をするのは、本来の「文人」の理想的な行いであり、だからこそ淇園は多くの後進の文人画家たちの尊敬をあつめました。

お教えいただいた論文・史料によって、宝暦3～4年頃の淇園の動向がより明確に分かるようになりました。ご教示感謝申し上げます。

（宮崎もも）

季刊 美のたより No.215

令和3年7月3日

発行 大和文華館